

生徒の自己肯定感を育み、 学校を活性化させ地域を創造する応援団活動の実践

香川県立高松北高等学校
教諭 筒井 京

1 はじめに

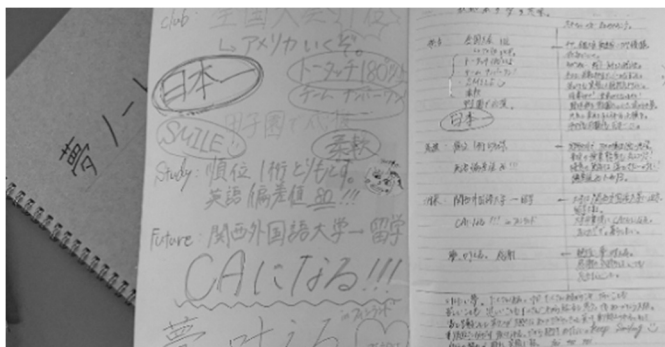
私の実践は、校内で価値を失いつつあった応援団に対し再び存在意義と価値を与えることで、応援部員たちが変化し、それに伴い、校内、他校、地域にも変化をもたらしたものである。かつて、応援団（応援部）は多くの学校で活発に活動していた。私自身もかつては本校応援部で団長を務めており、充実した高校生活を送った。しかし、赴任した平成 22 年には、本校応援部では 3 人の 3 年生と 1 人の 2 年生のたった 4 人が細々と活動している状況であった。彼らの「応援にいても誰も喜んでくれない。何のためにやっているのか分からない。」との言葉に衝撃を受けた。仲間のために心から「応援」という行為は尊いものである。彼らの活動に意義を与え、感謝される喜びを感じてもらいたい、というのが私の取組の原点である。少しずつ活動の幅を広げていく中で「応援」には仲間や校内だけでなく地域や地域の方々に対しても役立つ力があるということに気づいた。また、活動を通して部員たちの自己肯定感が高まっていくことが感じられた。友人や地域の役に立つと実感した時に生徒は大きく成長する。意欲的な取組は周囲にもよい影響を与え、校内の活性化のみならず、他校との協働や地域社会との連携を通して、地域活性化や新たな地域創生につなげていくことができる。

2 実践の内容・方法

(1) 実践内容

① 応援部員の意識改革（自尊心の再構築による意欲の向上）

応援部の活動は「北中高生、北中高、地域のために役立つこと」と定義し、できることを部員に検討させた。他校とは違う「北高らしい応援」方法を部員とともに考え、自尊心を育んだ。さらに平成 28 年度より夢ノートを作り、日誌としても活用して自己評価させ、それに対し指導者からアドバイスしている。自分自身の日々の取組が夢の実現につながっていると考え、意欲的に部活動に参加するようになった。



【夢ノートに書かれた夢や目標】

② 校内の認知度の改善（他者評価の向上）

応援部の活動は、まず校内の生徒と教職員の理解なくして成り立たない。かつては部員 30 人以上が活動していた応援部であるが、年月を経る間に応援部が校内での信頼を失っていた。そこで、昼休みに中庭で「北高らしい応援」を何度も実践した。ま

た、野球部以外の運動部の応援や校外研修出発式等での応援を行うことで、一般生徒の興味関心を高め教職員の理解を深めることに成功した。

③ 外部の人材の活用（専門的指導者の活用による技術向上と高い目標の設定）

本校応援部では、平成 23 年度からはチアリーダー部門を常設した。平成 27 年度より外部コーチを招聘して競技チアに取り組み、全国大会出場を目標に掲げた。一方、リーダーも有名大学現役リーダーや大学教授を招き指導を受けるようにした。

④ 他校との連携（協働による応援文化の普及・発展への挑戦）

応援部を取り巻く状況は、県内の他校も本校と同様である。そこで、高松高、高松西高両校応援部に声をかけ、平成 24 年 3 月 11 日に東日本大震災の復興支援として行った復興支援イベントは、他校との協働による応援部活動の新たな可能性を広げると同時に、県内他地域への応援文化の普及・浸透の大きな足掛かりとなった。以来、一歩ずつ県内の高校応援部が連携できる組織作りを進めていった。

⑤ 地域との連携（応援活動の多角化への挑戦）



【地域の方々との交流活動の様子】

平成 23 年度より地域のイベントに参加している。現在は多くの依頼を受け、地域の大小様々なお祭りや地元小学校のふるさと祭り、中学校の文化祭、県立保健医療大学学園祭等に出演している。また、ボランティア活動として大島青松園や高齢者施設への訪問、募金活動、献血活動、地域清掃活動なども行い、応援活動の多角化を進めている。

3 実践の成果

(1) 生徒の変化

現在、部員達は活動を通じ多くの生徒や地域の方々に関わる。自分たちの活動が、野球応援での表彰（過去 4 回）、チアの全国大会出場（団体 3 回、個人 1 回）、青少年育成県民会議からの表彰（平成 29 年善行賞）と評価されたことに加え、校内、地域の多くの方から温かい声援をいただくようになった。それらにより自分達の活動に自信を持ち、新たな取組にも積極的、献身的に取り組むようになった。今年度の休校中には部独自に動画を作成するなど、応援部としてできることを自主的に模索するまでになっている。多様な生徒が入部してくるが、その多くは 3 年間部活動が続ける中で「北高生の鑑」となるよう生活態度にも誠実さと責任感がみられるようになり、その姿勢は部の伝統として先輩から後輩へと継承されるようになった。また、地域貢献に取り組む中で地域の課題に気付き自分達にできることを考えて行動するようになるなど、部員達の地元愛が強まるのも大きな変化である。そのためか、地元の大学等への進学者数も増加し、県外大学に進学後香川県に就職した部員も多い。県立保健医療大学学園祭出演がきっかけで地域医療に貢献したいと考え同大学に進学する部員も毎年出ている。将来にわたって地域に貢献しようとする人材の育成につながっている。



【地域イベントに参加する様子】

(2) 校内の変化

応援部が校内外での活動を拡大していく中で、他の文化部も積極的に地域イベントに参加するようになった。令和元年度は6つの部（書道、理学、茶華道、吹奏楽、合唱、邦楽）が独自に地域イベントを企画または参加した。美術部も地域の観光名所の看板作成や、地元神社のお守りのパッケージデザインをするなど、積極的に地域貢献を果たした。文化部全体の地域貢献活動は平成23年度の6から昨年度は40にまで増加した。また、今年度は高松市立木太幼稚園からの依頼を受け、応援部と吹奏楽部が連携して園児に向けた動画作成を行うなど、複数の部活動が協働して地域貢献に取り組む試みも増え始めている。

(3) 他校との関係の変化

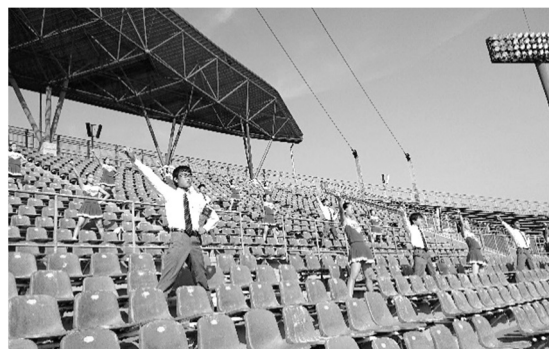
平成24年度以降、毎年香川県高等学校応援フェスティバルを実施し、参加校は開催当初の5校から10校に、参加者数も約50名から200人弱にまで増えている。県内最大の応援団の合同イベントとして定着してきた。また、香川県高等学校応援連盟設立（平成26年度）、県高文連応援部門設置（平成29年度）と各校応援部と連携するための組織化も実現した。これらにより合同での練習や研修の実施、サンポート高松トライアスロンなど大規模イベントへの合同での参加が容易となった。生徒も指導者もそれぞれの学校の取組や演技等の情報交換の場として活用している。また、高野連と連携して野球場の応援施設の設置などを実現させることもできた。さらに、今年8月20日にレクザムスタジアムで実施した「2020年香川県高等学校応援団一斉エール」では、趣旨に賛同した県内8校の高校応援団が参加した。学校単独では実施が困難なことでも、県内高校応援団をつなぐ2つの組織があればこそ実施できた取組である。いまや香川県は、全国的にみても高校応援団の連携が盛んな県の一つとなった。



【香川県高等学校応援フェスティバルの様子】

(4) 地域との関係の変化

10年の取組を経て、地域の方々には応援部の活動に対するご理解が広がっていると実感している。小中学生の頃に見た活動を見て憧れて入部する生徒や、地域の方に勧められて入部した生徒など、活動の普及・継続のうえでよい循環が生まれている。また、地域の方々の要望を受け、他の部活動との合同イベントの依頼を持ち込む地元デザイナーもいる。地域に頼りにされ、大切にされる学校になりつつあると感じている。



【香川県高等学校応援団一斉エールの様子】

4 普及させたい取組と期待される効果

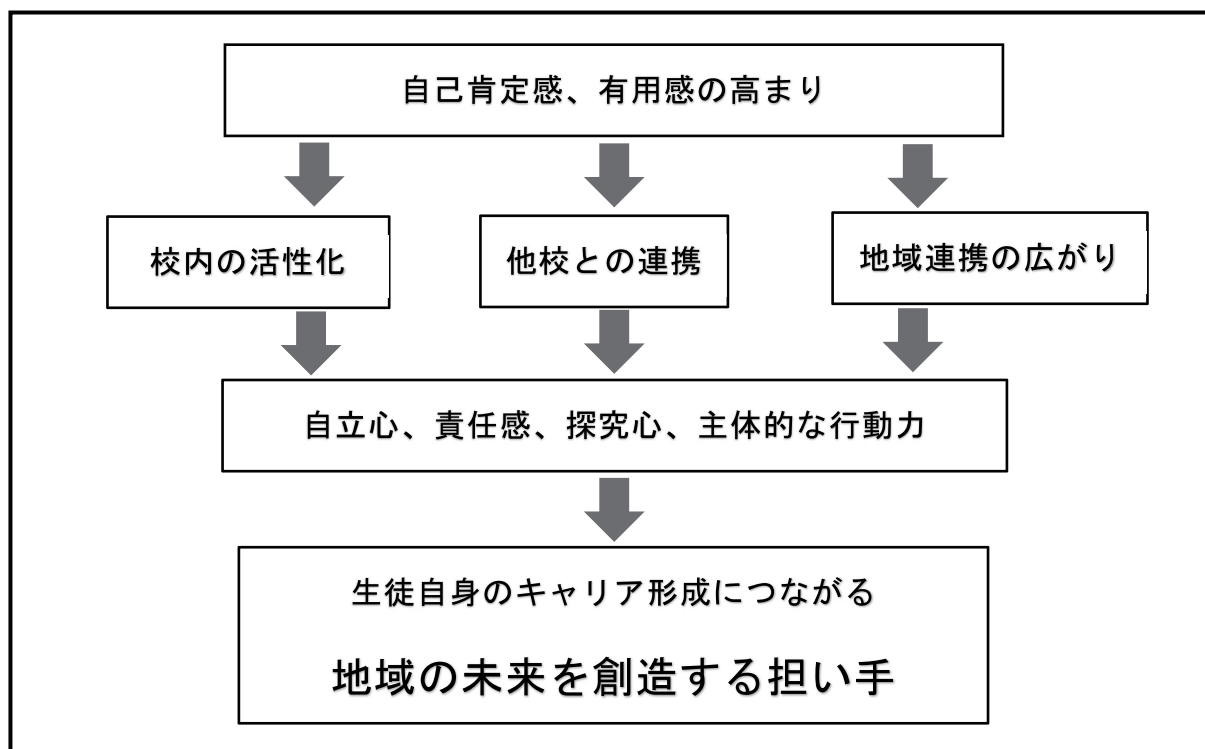
さらなる地域イベントなどへの積極的な参加は他校に普及させたい。イベント参加は応援部の活動の幅を広げると同時に、生徒の自己肯定感や地域への貢献意欲を高めるうえで大変効果的である。また、県全体の応援部の活動を活性化させるためにも、これ

まで以上に指導者研修を充実させ熱意ある指導者を数多く養成したい。熱意ある指導者の増加は、生徒の活躍の場の保証となる。熱意があれば技術指導ができなくても、外部指導者の活用や他校との連携で補うことができる。さらに各応援部や指導者がそれぞれ孤立しないように、前述の組織やイベントを有効に活用し取組を共有したい。そうすることで、それぞれの学校・地域が元気になり、県全体の活性化につながると思われる。また、この取組は応援部に限らず、どのような活動でも応用可能である。それぞれの学校が持つ資源を活用すれば、それぞれの学校らしさを生かした連携を進めることで、それぞれの活動の特徴を生かした人材の育成や地域貢献ができるものと確信している。

5 課題及び今後の取組の方向

部員たちがこれまで以上に、自分たちのできることを主体的に考え実践していけるように支援しつつ、彼らの地元愛や地域への誇りを育み、地域に一層貢献できる人材の育成に努めたい。しかし、現在本校の応援部は年間 50 本以上の応援活動を行い、部員たちはやりがいを感じる一方で多忙感や練習時間の確保、学業との両立に悩みを持つ。活動内容の精選の必要性を感じている。時代の変化や生徒たちそれぞれの状況を的確につかんだ上で、適切な指導をしていきたい。また、活動の多角化により応援本来の趣旨や役割以上に、全国大会出場や他者からの評価を優先する意識が強くなるかという懸念もある。応援部の活動は、応援する相手に頑張ってもらいたいという純粋な気持ちで全身全霊をかけて行うものである。この原点を心に刻ませ、一つ一つの取組に真摯に向き合わせながら、他者の喜びや地域の活性化のために行動できる生徒を育てたい。そして、この意識をこれまで以上に校内外の生徒にも普及させ、地域社会に貢献できる人材を幅広く輩出したい。

生徒の人格を磨きキャリア形成につなげながら、学校・地域の未来を創造していく意欲と行動力を持った人材を育成することが、この取組の永遠の目標と考えている。



【今回の実践の概念図】